

福井の幕末明治 歴史秘話

<第6号>

平成28年3月31日発行

福井の偉人を支えた女性たち～逸話の中に見えてくる偉人の原点～

今回は、福井の偉人、松平春嶽、梅田雲浜、由利公正を支えた3人の女性にスポットを当てます。

最初に、福井藩主松平春嶽の正妻、勇姫（いさひめ）。

勇姫は、熊本藩主、細川斎護の三女で、春嶽13歳、勇姫7歳の時、二人は婚約しています。その後、当時全国的に猛威を振っていた天然痘に罹患しました。一命はとりとめたものの、顔に「あばた」が残ってしまったので、細川家は、婚約解消を福井藩に申し出ています。しかし春嶽は、「いったん婚約した以上は、相手がどんな身体になろうとも結婚する。」と返答し正妻に迎えました。

福井藩に輿入れした勇姫は、和歌や読書を能くして教養を深めたほか、大奥での儉約を勧めました。また、熊本藩より横井小楠を招聘する際には、熊本藩主である父親にかけ合ったといえます。春嶽の進めた財政改革や人材登用の裏には勇姫の内助の功があったと言えるかもしれません。

※福井市立郷土歴史博物館の春季特別展「江戸の小袖の春夏秋冬」（3/19～5/5）で勇姫が実際に着用していた小袖を展示中です。



勇姫肖像

次に、尊王攘夷の指導者梅田雲浜の妻、信子（しんこ）。

信子は、大津の儒学者上原立斎の娘で、こんな逸話が残っています。小浜藩を追われ貧しい日々を送っていた雲浜ですが、家に儒学者を招き接待しなければならなくなりました。信子は自慢の琴を質に入れ酒代に変えたものの、客が信子の琴を聞きたいと言い出したため、着ていた着物を質に入れて琴を請け出し、襖の外で襦袢姿で琴を弾いたということです。信子は雲浜が全国を飛び回る中、病床に伏し、29歳の若さでその命を終えますが、美人の誉れ高く、夫に尽くし、困窮した梅田家を支えたと伝わっています。

最後に五箇条の御誓文の草案の起草者由利公正の母、幾久（いく）。

幾久は、三岡家の貧しい家計を当時一人で切り盛りしていました。彼女は女中を雇うことなく、家族の衣服一切を手織りで縫い、自家菜園で収穫した野菜等で食卓を賄いました。母の草むしりを手伝いながら由利は考えるようになります。“農民は田畑を耕し、生計を立てるが武士は一体何を生み出しているのか？武士は一体何の役に立っているのか。”この経験が、「武士の本文とは領民への慈しみである。＝民富めば国富む」の由利の信念の基になります。領民の生活を第一に考える、由利の原点は母、幾久にあったのかもしれません。

～幕末ふくい歴史紀行～

[由利公正宅跡]

・母幾久とともに暮らした由利公正邸。横井小楠の案内で坂本龍馬も足羽川を渡り、訪ねたといわれています。実際の家場所は、明治の河川改修工事により川の中に消滅しました。今は、堤防に石碑が残るのみです。

住所：福井市毛矢2丁目（幸橋南詰下流側）（JR福井駅から徒歩11分）



由利公正宅跡

★お知らせ ふくい春まつりの越前時代行列に「福井幕末維新隊」が登場！

- ・平成28年4月9日（土）の越前時代行列に、今年から新たに「福井幕末維新隊」が新設。
- ・由利公正役には、福井市出身で男性ヴォーカルグループ「LE VELVETS（ルベルヴェッツ）」の黒川拓哉さん。横井小楠、坂本龍馬、橘曙覧、日下部太郎、グリフィスなども加わり50名の隊列が春まつりを盛り上げます。